

目次

研究会発表要旨	
『パルムの僧院』における宮廷の「苦々しい笑い」(上杉誠)	... 1
血染めのプロット - イタリア写本 179 から『カストロニ僧院長』へ - (山本明美)	... 2
『リュシアン・ルーヴェン』における絵画的要素をめぐって (小林亜美)	... 4
書評	
プレイヤーード新版『アルマンズ』について (田戸カナ)	... 6
活動報告	... 7
後記	... 8

2008年5月24日 スタンダール研究会（青山学院大学） 発表要旨

『パルムの僧院』における宮廷の「苦々しい笑い」 上杉誠

小説を書き始める以前に多くの著作の残しているためなのだろうか、スタンダールの小説作品を論じるために小説以前の著作を参照することはこの作家を研究する際一つの定石となっているように思われる。本発表では、『ラシーヌとシェイクスピア』（1823 - 1825）で述べられる笑いに関するスタンダールの議論を出発点に、小説作品とりわけ『パルムの僧院』（1839）を論じるための手がかりを探してみた。

本発表で注目したいのはとりわけ「苦々しい笑い（rire amer）」と呼ばれるものである。「苦々しい笑い」とは礼儀作法の順守が絶対とされた絶対王権のよとの宮廷において、決められた型から外れた振る舞いをしてしまった者に向けられる嘲笑の笑いである。宮廷の貴族たちはまるでゲームの規則に従うかのように決まった型に倣って行動しようと汲々とするのだが、とりわけ新興貴族は宮廷で振る舞うべき「型」を十分に知らないため「苦々しい笑い」の的となり易い。このような「苦々しい笑い」は同時に、既存の規範に従う集団にはそぐわない振る舞いをする人物を肯定的な価値に向けて際立たせる指標ともなりうる。自己の幸福を追求し情熱に駆られた結果、「型」から敢えて逸脱するような特異な人物の姿を「苦々しい笑い」は浮き上がらせてくれる。むしろ、「苦々しい笑い」に毒された硬直した社会を舞台にするからこそ、その「笑い」を振り切る情熱の行動が対比として鮮やかに描かれ得る。さらに、既存の規範から逸脱する行動は、スタンダールをめぐる「狂気」の主題にも接続するだろう。

「苦々しい笑い」とそれによって浮かび上がる情熱に駆られた行動は、スタンダールの小説作品に頻出するテーマであるだろう。実際、『赤と黒』ではパリの社交界、『リュシアン・ルーヴェン』では地方都市ナンシーの社交界、『パルムの僧院』ではイタリアミラノの社交界、グリアンタの城、パルマの宮廷をそれぞれ舞台にしながら、定まった「型」に支配される凡庸な者たちと、その「型」を振り切る特別な人物の対比が描かれているだろう。『パルムの僧院』を例にとった本発表では、作品内で描かれる宮廷での具体的な規範を読み取ったうえで、その規範に拘束され「苦々しい笑い」を恐れながらも、遂には情熱に駆られ幸福を求め「型」から逸脱する人物（ファブリス、モスカ、大公、ジーナ）の造形を分析しようと試みた。

【研究発表要旨】

第51回(2008.12.26 於 京大会館)

血染めのプロット イタリア写本 179 から『カストロニ僧院長』へ

山本明美

5歳にして大革命の魁となる「屋根瓦の日」流血事件を、ナポレオンに従軍しては死屍累々を目撃したスタンダールが作品にしばしば滲ませた暴力や流血は、生々しいリアリテを嫌った古典派と一線を画し、ロマン派の宣言をした成り行きからも格好の素材であったろう。『カストロニ僧院長』の結末でヒロインが自刃する結末は読者に強烈な印象を残すが、それはこの作家がロマン派の巨匠と仰いだシェークスピアの恋愛悲劇『ロミオとジュリエット』の結末でヒロインが自殺する場面から着想を得たとしても不思議ではない。

但し、一小説家が造形する人物のモデルが唯一人ということは却って稀なことであろうし、石川宏氏がジュリアンの人物に、ラファルグ、ベルテ、ルソー、ダントン、タルチュフの他、『セント・ヘレナ覚書』のナポレオンを加えることでモデル候補を補完して見せたように¹、私も源泉探しを試みた。

イタリア写本 179 のヒロインもまた結末で短刀を胸に突いて果てる。J...C...oによる『バイアーノの修道院』(略称、『バイアーノ』)はこの話をフランス語に翻訳しつつ様々な加筆をする中でプロットを血によって念入りに繋いでいるが、殊に視覚に訴える類似状況を連ねる手法は、匿名の著者をスタンダールと睨んでいる私の目を引く。

イタリア写本 179 でヒロインの修道女が握る短刀は彼女の親友の恋人が残した形見である。ヒロインとこの友は夜間修道院の中庭を各々の恋人との逢引の場にしていた。ある晩恋人たちは不意の襲撃に遭った。彼らは「全身から血をしたたらせ」死処を求めて彼女らのところまで這っていき「足元によろめいた」(XIX,250)とあり、その点は『バイアーノ』でも変わらない。ただ、前者では「犯罪に関わった短刀 *criminoso coltello*」(XIX,270²)とあるのを後者では「血糊のついた短刀 *poignard ensanglanté*」(XVIII,409)と言い換え、一挿話を入れている。それは助任司祭による修道院査察中の出来事で、ヒロインの親友が修道院に「食料と使用料を運び入れる」農民同志の「流血の乱闘」騒ぎを聞きつけて駆け付けると、「致命傷を負った」農民が、「すっかり血まみれになって彼女の足元に倒れた」(XVIII,452-453)状況を加えている。やがて彼女の部屋を査察する司祭は、形見の短刀の入った箱と、「農夫によって血に染まった」彼女の靴を同時に目撃することになる(XVIII,455)。

イタリア写本におけるヒロインの最後は「夢中になって短刀を取り出すと不意に喜んでそれに

1 Cf. 石川宏、「スタンダールと『セント=ヘレナのメモリアル』」、『スタンダール変幻』、日本スタンダール研究会編、慶応義塾大学出版会、2002年、pp.37-58.

2 Cf. *OEuvres complètes de Stendhal*, publiées sous la direction de Victor Del Litto et Ernest Abravanel, Cercle du Bibliophile, Genève, 1967 à 1974, XIX, p.270. 以下、同全集からの引用はこの表示.

接吻し、短刀を柄まで胸 *petto* に突き通した」(XIX, 283) とあるのを、『バイアーノ』では「自分の心臓 *coeur* に柄まで刺し貫いた」(XVIII, 466) と訳している。「胸」から「心臓」への改変はわずかに見えるが、『カストロニ僧院長』の結語でも「彼女の心臓 *coeur* には短刀が貫いていた」(249) とある。スタンダールは『バイアーノ』を剽窃したとデル・リットが見ているのはこうした個所などをふまえてのことであろう。だがこの作家は 1803 年 20 歳の頃、「美しい胸」よりも「アルバーニ風」に「解剖学」に基づいてその「胸部を形作っている筋肉を血がしたたるまま露骨に」描く望みを記している (XXIX, 27)。

いずれにせよ、『バイアーノの修道院』が出版されて 2 週間後にスタンダールは『ローマ散策』を出版し、その中で「自刃する *se donner la mort avec un poignard* ことを何よりも望んでいた」修道女らの悲劇は「どんな悲劇にも比べられない」(VII, 352) と紹介し、『バイアーノ』の宣伝を行っている (VI, 106) のを見ると、『カストロニ僧院長』でヒロインの最後を構想する作家にとって、シェークスピアの悲劇よりも³、『バイアーノ』の方が記憶に新しいはずである。

その 3 ヶ月程後の 1829 年 12 月 13 日にスタンダールが刊行した『ヴァニナ・ヴァニーニ』の冒頭では、警官が脱獄したカルボナリ党員を「血痕を手掛かりに追跡」するが、同じ時ヒロインの目も「短刀で何度か刺されたように見える」「血まみれ」のドレス、「血のついた」靴、「血に染まった」大きなシーツを追って謎の女の正体に迫っている (XXXVIII, 46, 48)。

その 1 年程後に刊行した『赤と黒』で、主人公 Julien Sorel は自分の名のアナグラムからなる「Louis Jenrel⁴」という男の処刑を伝える紙片を見た直後、聖水盤の水滴が「血のように見え」(I, 45) て怯む。この場面を彼の末路の予告と見るのは難しくない。

その 9 年後に発表の『カストロニ僧院長』でスタンダールは、ヒロインを奪還するため山賊に修道院を襲撃させる。山賊が彼女に贈ろうと携えた花束は襲撃中「血で汚れ」たこと、彼女は「彼の血で染まった地面」を忘れ形見にしたこと (XVIII, 204, 221) に触れ、血のモチーフに結末への橋渡し役をさせている。主と対話すべき平穏な修道院の庭が暴力と流血の場に変容するという点で、『カストロニ僧院長』に括弧つきで『バイアーノ』を引き寄せたのは、フィリップ・ベルティエである。

修道院地勢の両義性は庭がそこに占める機能にまさしく現れる。厳めしい城壁の裏に隠れたオアシス。それは勿論この世の悦楽と別れ、主と対話して無邪気な喜びを安らかに味わう

オルツス・コンクルスス

秘密の庭園である。しかしそれはまた冒読者の逢瀬の、裏切りと暴力の、性的絶頂と致命的な流血の場でもある。処女としての召命はそこで破局的に度を越し罪に転ずる。無邪気な環境はそこで荒々しく踏み荒らされ汚され (『バイアーノの修道院』に認められる) 恥ずべき光景において [...] 取り返しの利かない危機の様相を呈し、この場もまた遂に逃げ道のない陥穽と化す⁵。

3 『ジュルナル・ド・パリ』に「ロメオとジュリエッタ」について小文を寄稿したのは 1825 年 4 月 7 日である (Cf. XXIII, 345-347)。

4 Cf. Borgerhoff E.B.O., The anagram in 《 Le Rouge et le Noir 》, *Modern Language Notes*, LXVIII, 1953, pp.383-386.

5 Cf. Philippe Berthier, Topo-énergique de 《 l'Abbesse de Castro 》, *Stendhal Club*, N 110, 1986, p.138.

『リュシアン・ルーヴェン』における絵画的要素をめぐって

小林 亜美

『リュシアン・ルーヴェン』は社会小説的観点から論じられることが多く、『パルムの僧院』などの場合のように絵画との関連に着目される例は少ないように見受けられる。しかし、この作品中に散見される“絵画的要素”は非常な重要性を持っているのではないだろうか。それら“絵画的要素”を、“オブジェ”として小道具的に登場するものと、“人物描写”に関わるものとは大きく分類しつつ分析を加え、スタンダールの小説作品における絵画性というテーマへのアプローチを試みた。

1. “オブジェ”としての絵画作品

ナンシーに着任してすぐにリュシアンが購入する「ルイ＝フィリップの肖像画」や、王党派のサロンに祭壇画のように祭られている「アンリ五世の肖像画」。小説中にはこれら政治的色彩の濃い絵画作品が“オブジェ”として現れる。詳細に描き出されるこれら権力者の肖像画がカリカチュール的役割を果たし、物語に滑稽味を添えていることは明白であろう。

一方、ドカンクール夫人のサロンのテーブルには「反体制的カリカチュール」が積まれているが、ここではこの「カリカチュール」はその意味内容を消去された存在であり、シャストレール夫人とリュシアンとがそれを挟んで人目を忍び言葉を交わすためのアリバイとしてのみ作用することとなるのである。こうした、恋人達の間を仲介する役割を果たす絵の例としては他に、シャストレール夫人の部屋に飾られた「モルゲンの版画」が挙げられるが、ここでもやはり絵の意味内容は問題とならず、版画は空白のまま、夫人とリュシアンとが言葉をかわすきっかけを与えているのである。

2. 人物描写に関わる絵画的要素

人物描写に関わる絵画的要素も大きく二つのタイプに分けられる。その第一のものは、直喩的に作品または画家の名が引用される例であり、それは一瞬にしてそのイメージを浮かび上がらせる効果を持つと言えるだろう。その最大の例はシャストレール夫人と対をなすヒロイン、グランデ夫人に与えられるヴェロネーゼの名であり、彼女は、「パオロ・ヴェロネーゼが描く若いヴェネツィア女達のような」美女、とされるのである。ところで、スタンダールの言に拠ればヴェロネーゼは「理想を欠いた画家」である。そして、こうした否定的ニュアンスはこの手法で描写される他の登場人物にもつきまとっているのである。

一方、シャストレール夫人については、上記のような直喩的引用は認められない。画家の名が引かれる箇所がないわけではないが、例えば彼女の髪の色について「ラファエロやカルロ・ドル

チが彼らの描くこの上なく美しい頭部に与えた赤褐色ではない」というふうに、歪曲された形で現れているにすぎない。さらに、リュシアンが陶器コレクションの中でシャストレール夫人に似た顔を見つけ、それを友人となった若い画家に模写してもらい、描きあげられた「その聖なる絵」の前で涙にくれる、というエピソードがあるが、ここでもその絵は空白のままにされており、われわれの眼差しを完全に拒んでいるのである。

以上の分析から、『リュシアン・ルーヴェン』においては、絵画的要素はそれがオブジェとしての具体的な存在感を失うほどに、また、直喩的表現から遠ざかってイメージの固定という絵画本来の性質を失うほどに、小説中での重要性が増していると言えよう。ところで、われわれの眼から逃げ去っていくような捕らえ難いこうした絵画的要素はさらなる発展を見せているように思われるのだが、それは“窓”というモチーフのもとで現れてくる。

3. 絵と窓と視線

リュシアンとシャストレール夫人とは、絵を介してという以上に、“窓”を介して結びついている。「緑の窓」にあらわれる夫人の束の間のイメージを、当初リュシアンは求めていたのではなかっただろうか。“窓”のモチーフはこの小説のみならず、他の作品にも繰返し現れるが、スタンダールにおいては、時に窓枠が絵の額縁であるかのように作用し、そこに理想化が起きると言い得るように思われる。絵画を愛しつつ、逆説的にも、半永久的にカンヴァスの上に固定された美よりも、瞬間の美を求め、決して繰り返されることのない、瞬間の幸福を追い求め続けたスタンダールにとっての理想的絵画は、エクリチュールのみがとらえ得る一瞬にこそ、あったのではないだろうか。シャストレール夫人の描写についても、その金髪が時には「灰色がかった」と言われ、時には「榛色」と言われるように、決して固定されたものではない。未完に終わった小説であるがゆえの不完全さに由来するものであるとして片付けるのは容易だが、ここにはむしろ、理想の女性の、あるいは理想美の周囲をめぐるスタンダールの、あるいはリュシアンの想像力が働いているように思えるのである。緑の鎧戸の隙間から姿を現す理想の、かりそめの絵画は、一種捕らえがたいものとして、永遠にたゆたっているのではないだろうか。

以上が現時点での結論であるが、『リュシアン・ルーヴェン』における絵画的要素については、今回とりあげることができなかったものも多数ある。そうした点も含めて、今後さらに分析を続けていきたい。

プレイヤー新版『アルマンズ』について

田戸カンナ

周知のように、イヴ・アンセルとフィリップ・ベルチエの校訂によって2005年に出版されたプレイヤー版、スタンダール『小説作品全集』には『アルマンズ』が収められている。この出版から既に四年余りの月日が経過したが、この新しいプレイヤー版所収の『アルマンズ』について一言触れておきたい。

この『アルマンズ』のテキストは、1827年にユルバン・カネル書店から出版された初版を採用している。この点で、ブッチ本に記されたスタンダール自身による修正・加筆を優先的に採用したシャンピオン版『アルマンズ』及びセルクル・デュ・ビブリオフィル版『アルマンズ』（ともにレーモン・ルベグ校訂。それぞれ1925年、1967年）、フォリオ版『アルマンズ』（アルマン・オグ校訂、1975年）とは異なり、初版を採用したアンリ・マルチノによるプレイヤー旧版『アルマンズ』（1952年）、同じくアンリ・マルチノによるガルニエ・フレール版『アルマンズ』（1962年）、ミッシェル・クルゼによるロベール・ラフォン版『アルマンズ』（1980年）などの大きな流れに沿うものとなっている。そして今回のプレイヤー新版では、初版における明らかな誤り三箇所を訂正したことが校訂者によって明言されている（*Œuvres romanesques complètes I*, Pléiade, 2005, p. 887）。

ブッチ本に記されたスタンダールのメモ書きについては、ラ・ルヴュ・フォンテーヌ版（1946年）、ガルニエ・フレール版、ロベール・ラフォン版などにおけるように、これまではテキストそのものの修正・加筆並びに短いコメントと、その他の長いコメントを区別して別々に掲載するのが常であったが、プレイヤー新版ではこの区別を撤廃し、メモ書きをブッチ本に書かれている順序にほぼしたがって、章ごとに分けて注内に掲載している。したがって、メモが書かれている順番がこれまでの版よりも一層詳しく示されている。またプレイヤー新版では、「Roman」、「l'Action」における大文字など、スタンダールの筆記をそのままに重んじて転写している点も注目される。

しかしながらプレイヤー新版においても、ブッチ本に記されたスタンダールのメモ書きの全てが掲載されたわけではない。インターネットでミラノ市立図書館・スタンダールセンターのサイトを使用して『アルマンズ』ブッチ本と照らし合わせてみると、解読不能の断りもないまま掲載されていないメモ書きがいくつか存在する。また、スタンダールの筆跡の読みに大きな疑問が残る箇所もある。

一方、アンリ・マルチノによるプレイヤー旧版、ガルニエ・フレール版とは異なり、プレイヤー新版は、1854年のミッシェル・レヴィ版『アルマンズ』のテキストとの相違を明示してはいない。それでも、上に述べた、初版に対する態度の明示、ブッチ本のメモ書きの扱い、また先行研究をふまえた注の詳しさ、ビブリオグラフィーの量からしても、このプレイヤー新版が現在のところ『アルマンズ』の最良の版と言えるだろう。ただ、「que, je voudrais」（p. 161）のヴィルギュールのように、説明もないまま初版のテキストどおりになっていない箇所や、「Gaz[ul]」（p. 905）の後の丸括弧が抜け落ちておりブッチ本のメモ書きどおりになっていない箇所、メモ書きの位置の指示がブッチ本と異なっている箇所が見受けられる。

【会員活動報告】(2008年4月1日～2009年3月31日)

岩本和子

『スタンダードと妹ポーリーヌ 作家への道』青山社、2008年9月

下川茂

《 *Le Rouge et le Noir et La Bible - Julien et Jésus* 》ふくろう出版、
2008年12月

杉本圭子

「古代の逆襲 - メリメ『イールのヴィーナス』試論」、『言語文化』第26号、
明治学院大学言語文化研究所、2009年3月、p.177 - 188

高木信宏

「エツエル版『赤と黒』をめぐって」、『文学研究』第106輯、2009年3月、
p.27 - 44

田戸カンナ

「デュラス夫人『ウーリカ』と『エドゥワール』における海、島」、『学苑』
第814号、昭和女子大学、2008年8月、p.1 - 10

後記

「会報」第19号をお届けします。

前号と打って変わって、ちょっと薄めの号になりました。

会員活動報告の欄には、必ずしもスタンダードを論じたものでなくとも、同時代の作家などに関する論文であれば記録したいと考えます。われわれの思考回路のなかで、それがスタンダードを考える際の導きの糸になる可能性があるからです。どしどし活動報告をお寄せください。(後平隆 記)